**防災無線で避難を呼び掛け、職責を全う**

東日本大震災の死者・行方不明者は二万人近くに達した。この中には自らの職責に殉じたケースもある。大津波にあらがい、一人でも多くの住民を救いたい一心で務めを果たした姿が、人々の心に焼き付いている。

「大津波警報が発令されました。高台に避難してください」。防災無線の呼び掛けが、多くの命を救った。だが、声の主の行方は震災から一カ月たった今も知れない。

三月十一日午後時四十六分、宮城県南三陸町の防災対策庁舎二階にある危機管理課。町職員遠藤未希さん（二四）は放送室に駆け込み、防災無線のマイクを握った。

「六メートルの津波が予想されます」「異常な潮の引き方です」「逃げてください」。防災無線が三０分も続いたころ、津波は庁舎に迫りつつあった。「もう駄目だ。避難しよう」。上司の指示で遠藤さんたちは、一斉に席を離れた。

同僚は、遠藤さんが放送室から飛び出す姿を見ている。屋上へ逃げたはずだった。が、津波の後、屋上で生存が確認された一０人の中に遠藤さんはいなかった。

南三陸町の住民約一万七七００人のうち、半数近くが避難して命拾いした。遠藤さんは、多くの同僚とともに果たすべき職責を全うした。

遠藤さんは一九八六年、南三陸町の公立志津川病院で産声を上げた。待望の第一子に父清喜さん（五六）と母美恵子さん（五三）は「未来に希望を持って生きてほしい」との願いを込め「未希」と命名した。

志津川高を卒業後、仙台市内の介護専門学校に入学。介護の仕事を志したが、地元での就職を望む両親の思いをくみ、町役場に就職した。同僚は「明るい性格。仕事は手際よくこなしていた」と言う。

二〇一〇年七月十七日、専門学校で知り合った男性（二四）と、町役場に婚姻届を出した。職場仲間にも祝福され、二人は笑顔で記念写真に納まった。

両親は当初、二人姉妹の長女が嫁ぐことに反対だった。「どうしてもこの人と結婚したい」。男性が婿養子になると申し出て、ようやく両親も折れた。二〇一一年九月一０日には、宮城県松島町のホテルで結婚式を挙げる予定だった。

美恵子さんは「素直で我慢強い未希が人生で唯一、反抗したのが結婚の時。それだけ、良い相手と巡り合えたのは幸せだったと思う」と語る。

遠藤さんの声は、住民の記憶に刻まれている。

山内猛行さん（七三）は防災無線を聞き、急いで高台に逃げた。「ただ事ではないと思った。一人でも多くの命を助けたいという一心で、呼び掛けてくれたんだろう」と感謝する。

娘との再会を果たせずにいる清喜さんは、無念さを押し殺しながら、つぶやいた。

「本当にご苦労さま。ありがとう」

※追記　遠藤さんの遺体は四月二三日、志津川湾で見つかった。左足首に夫から贈られたオレンジ色のミサンガが巻かれていた。県警のＤＮＡ鑑定の結果、遠藤さんと確認された。

（河北新報社編集局『再び、立ち上がる！　河北新報社、東日本大震災の記録』筑摩書房より）